

ファミリー・サポート・センターに関する

若年層の意識

——薬大生の調査を中心に——

小 松 楠 緒 子

1. はじめに

現在は、女性の社会進出および核家族化・都市化の進行により、育児負担が増加する傾向にある。そのため、ワーキング・マザーに対する仕事と家庭の両立支援がもてめられている。このような社会的要請を受け、厚生労働省は、ファミリー・サポート・センター（以下 FSC と略す）事業を導入した⁽¹⁾。なお本事業は、“エンゼルプランにおける緊急保育対策等 5 カ年事業”の一環として平成 6 年から実施されている〔テクネ研究所1998：1〕〔働女性労働協会2001a〕。

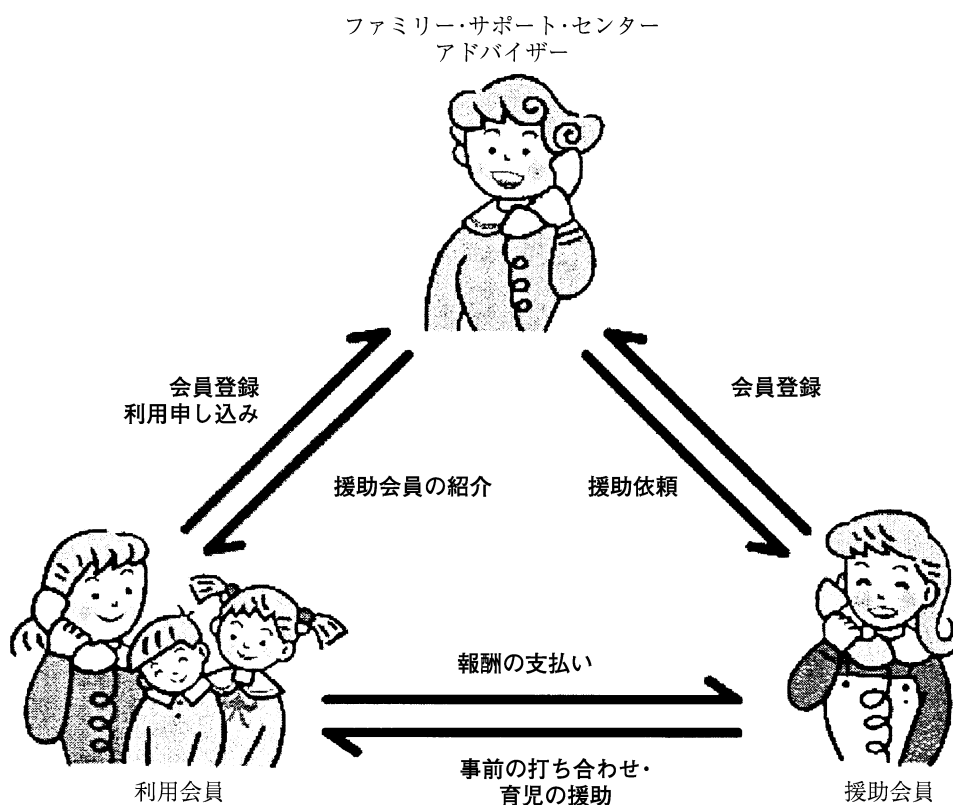
FSC のシステムは以下の通りである（図 1 を参照）。

- ① 育児支援を受けたいメンバー（利用会員）と支援したいメンバー（援助会員）が、それぞれ会員登録をする。
- ② 利用会員の要請に応じ、アドバイザーが援助会員と連絡をとり、調整を行う。
- ③ 援助会員が育児をサポートする。
- ④ 利用会員が援助会員に対し、報酬を支払う（有償ボランティア制度）〔働女性労働協会 2001a〕。

要するに、FSC は育児支援を求める側と提供する側をつなぐ相互支援組織である。設立・運営にあたるのは、原則として人口 5 万人以上の市町村（特別区を含む）、または公益法人。国・地方自治体から補助金が得られるため、利用者の費用負担は民間と比べ低額におさえられている。万一の事故に備え、保険制度があり（ファミリー・サポート・センター補償保険）、育児に関する講習会も実施されるなど、システムとしての完成度は高い〔テクネ研究所1998：2,12〕。国が率先して育児の外部化を行っている点に、時代の流れを感じる。厚生労働省 雇用均等児童家庭局 職業家庭両立課に問い合わせたところ、FSC は全国に広がっており、平成14年7月末現在、その数は222箇所にも達しているという（会員数は平成14年3月末の時点で86,421名）。

しかし現時点では、FSC に関する調査・研究は、女性労働協会、テクネ研究所によるもの〔働女性労働協会2001b〕〔テクネ研究所1998〕などごく少数にとどまっている。とりわけ若年層を対象にしたものは少ない。そこで本稿では、薬大生を対象として FSC に関する調査を行い、その考えの一端を明らかにする。

図1. ファミリー・サポート・センターの仕組み



2. 調査方法

調査実施日は、2002年1月10日。対象者は都内某薬科大学の「社会学」受講者108名である(当日出席者のみ)。はじめに筆者がFSCの概要について説明し、その後調査票に回答してもらった(無記名調査)。調査項目は、属性、FSCの利用意向、女性社会進出・育児の外部化・育児中の母親のあり方に関する意見、等である。

3. 調査結果

3-1. 属性

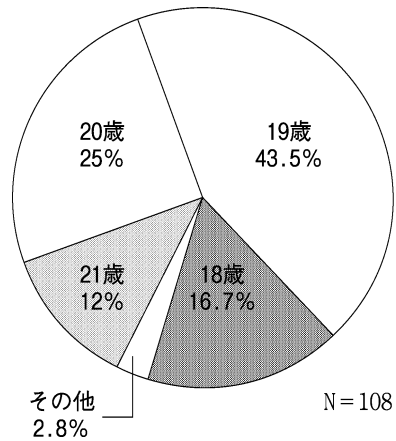
3-1-1. 性別

対象者の性別は、男性38.9%、女性61.1%であった(N=108)。

3-1-2. 年齢

対象者の年齢は、18歳16.7%、19歳43.5%、20歳25.0%、21歳12.0%、その他2.8%(内訳は22歳1名・23歳1名・24歳1名)であった(N=108 図2参照)。

図 2. 年齢



3-1-3. 婚姻状況

対象者のほとんど (98.1%) が「未婚」だった。なお、「既婚」は 1 名, 「その他」(「契約結婚 [サルトルとポーワール夫人]」) も 1 名であった (N=108)。

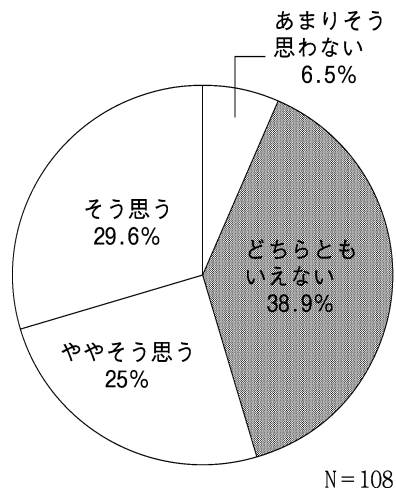
3-1-4. 子供の有無

対象者に子供の有無についてたずねたところ, ほぼ全員 (99.1%) が「子供はいない」と回答した。なお, 「その他」は 1 名で「いない」と答えていた (N=107)。

3-2. 女性の社会進出

「一般的に言って, 女性は家事・育児をするだけではなく, 外で働く方がよい」という見解

図 3. 女性は外で働く方がよい？



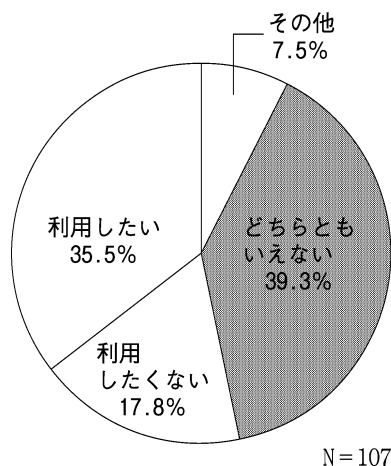
への賛否をたずねたところ、「そう思う」29.6%、「ややそう思う」25.0%、「どちらともいえない」38.9%、「あまりそう思わない」6.5%、という結果だった。なお、「そう思わない」と答えた者はいなかった。“肯定”が過半数に達しており、全体的にみて女性が外で働くことに賛同する者が多かった（N=108 図3参照）。

3-3. FSCの利用意向

「もしあなたが、将来子供をもち、保育の手が不足した場合、ファミリー・サポート・センターを利用したいですか」ときいたところ、「利用したい」35.5%、「利用したくない」17.8%、「どちらともいえない」39.3%、「その他」7.5%、という結果が得られた（N=107 図4参照）。現時点で3割強の者がセンターの利用を希望している。一方、「どちらともいえない」は4割弱である。これは、“まだ若いので（1名を除き未婚・子供なし）そんな先のことはわからない”ということかもしれない。「利用したくない」という否定的な回答は17.8%にすぎず、相当数のニーズがみこまれる。

なお「その他」の回答は、“慎重派”（「一回利用してから考える」「そのファミリー・サポート・センターをよく調べてから決める」），“こだわり派”（「援助会員が、“ただ子供が好きだからやっている”という職業意識に欠ける人だったら利用したくない」「子供をちゃんと叱ってくれるなら利用したい」），“心配派”（「利用したいけど、援助会員に嫉妬してしまうかもしれない」）など多岐にわたっている。

図4. 将来FSCを利用したいか



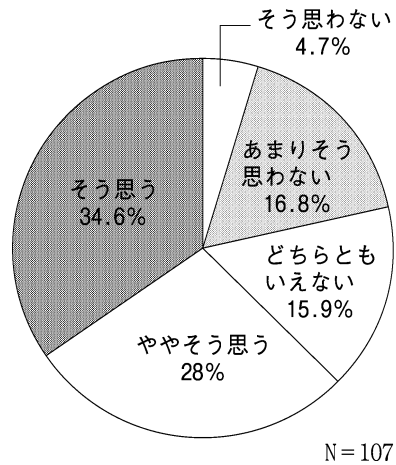
3-4. 育児の外部化について

3-4-1. 育児サポート

「一般的にいて、フルタイム（常勤）で働く女性の子育てを、他のひとが手助けするのは当然だ」という意見への賛否をたずねたところ、「そう思う」34.6%、「ややそう思う」28.0%、

「どちらともいえない」15.9%、「あまりそう思わない」16.8%、「そう思わない」4.7%、という結果だった（N=107 図5参照）。6割強が“肯定”であり，“否定”は2割にすぎない。全体的にあって、育児サポートに肯定的な傾向がみられる。

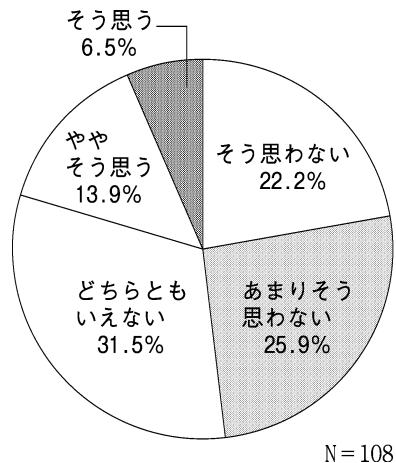
図5. ワーキングマザーの育児をサポートするのは当然か？



3-4-2. 被雇用者による育児

「一般的にあって、育児をお金で雇われたひとが行うのはよくない」という見解への賛否をたずねたところ、「そう思う」6.5%、「ややそう思う」13.9%、「どちらともいえない」31.5%、「あまりそう思わない」25.9%、「そう思わない」22.2%、という結果が得られた（N=108 図6参照）。“否定”は2割にすぎず，“肯定”は、約半数に達している。このデータからも、育児の外部化に対する抵抗が小さいことがよみとれる。

図6. 金で雇われたひとが育児をしてもよいか？



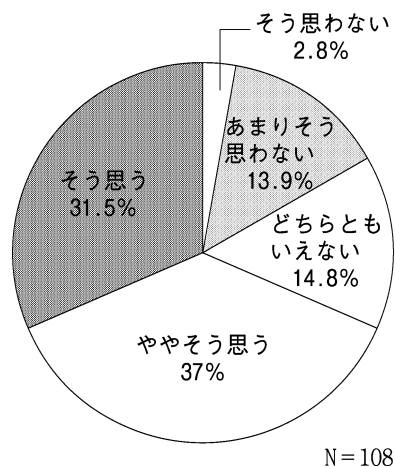
3-5. 育児サポート者に対する権利意識

3-5-1. 苦情

「一般的にいて、利用会員は、援助会員の活動のやり方に苦情を言う権利がある」という見解への賛否をたずねたところ、「そう思う」31.5%、「ややそう思う」37.0%、「どちらともいえない」14.8%、「あまりそう思わない」13.9%、「そう思わない」2.8%、という結果だった（N=108 図7参照）。“肯定”が約7割にのぼっており、全体的にみて利用会員の援助者への権利意識は強いと思われる。

以下はFSCの実例をもとに作成した設問への回答結果であるが、上記と同様の傾向がみられる。ここでは「あずかってもらっているのだから多少のことは我慢しよう」という遠慮は希薄であり、権利意識が強い。「金銭のやりとりをしているのだから、これはビジネスだと思う。ビジネスなんだから、利用者はビシッと言いたいことを言ってよい」（自由回答欄の記述より）ということなのだろうか。

図7. 利用会員は援助会員に苦情を言う権利がある？

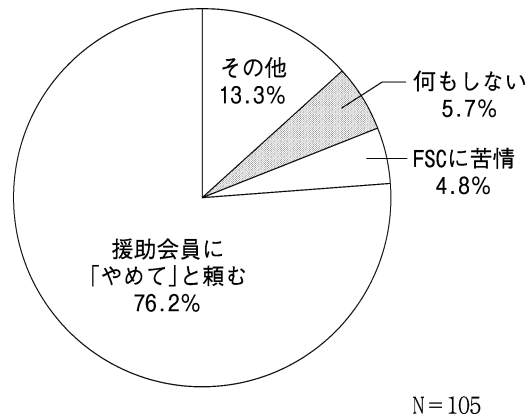


3-5-2. おもちゃ

「あなたが、利用会員として3歳の子供を援助会員に預けたとします。週1度預かってもらっているのですが、その度に、子供は援助会員から300円から500円程度のおもちゃを買ってもらっています。あなたならこういうとき、どうしますか」ときいたところ、「援助会員におもちゃを買い与えるのをやめてくれるよう、頼む」76.2%、「ファミリー・サポート・センターに苦情を言う」4.8%、「何もしない」5.7%、「その他」13.3%、という結果であった（N=105 図8参照）。サポート者に対し、「やめてくれるよう頼む」「苦情を言う」という積極的行動をとる者が8割以上にも達しており、利用者側の権利意識が高いことがうかがえる。なお、「その他」の回答は多様であり、「お礼派」（「お歳暮などを贈る」「いくら好意でも心苦しいのでその分のお金をわたす」「その分のお金をわたすといやがられそうなので、1ヶ月、2ヶ月

ごとぐらになんかのお礼の品をわたす)], “リストラ派” (「自分の家庭での方針を伝え、納得してくれなかったら援助会員をかえてもらう」), “心配派” (「たまにならいいけど、毎回もらっていると、“母親は買ってくれないからキライ!” ということになりそうでいやだ」) などがみられた。

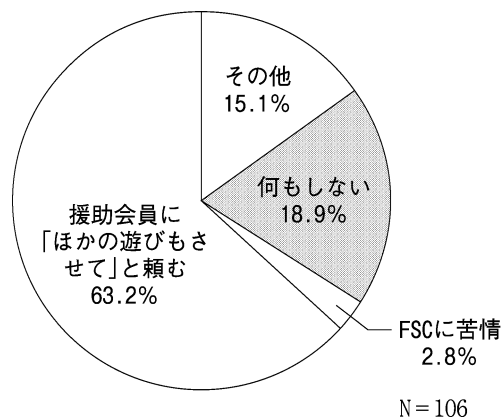
図 8. おもちゃを毎回買い与えられたらどうする？



3-5-3. ゲーム

「あなたが利用会員として、小学1年生の子供を援助会員に預けたとします。週2回3時間ほど預かってもらっているのですが、その間、子供はテレビゲーム（スーパーファミコン等。ゲームボーイを含む）ばかりしています。あなたならこういうとき、どうしますか」ときいたところ、「援助会員に、テレビゲーム以外の遊びもさせてやってほしいと頼む」63.2%、「ファミリー・サポート・センターに苦情を言う」2.8%、「何もしない」18.9%、「その他」15.1%、という結果が得られた (N=106 図9参照)。ここにおいても、援助会員に保育内容の変更を

図 9. 子供がゲームばかりしていたらどうする？

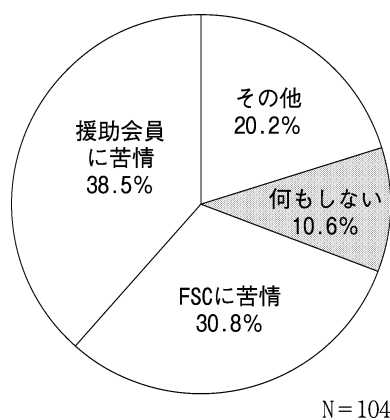


頼む、FSCに苦情を言うなどのかたちで自己主張する者が約7割にのぼり、前問同様、利用者側の権利意識が強いことがうかがわれる。なお「その他」の回答は、「子供を叱る」「子供をたしなめる」「子供に対して他のことを提案してみる（一緒にそうじ・買い物）」「まずゲームの腕をほめてやる。それで目のために2時間くらいあったら休憩させる。その後、本・マンガ・音楽などをすすめてみる」「別の援助会員にあずける」「子供にどうしたいかきく」など多岐にわたっていた。

3-5-4. 食事

「あなたが利用会員として、小学2年生の子供を援助会員に預けたとします。子供に夕食を食べさせてくれるよう、依頼していますが、(夕食が)店屋物とインスタント食品ばかりです。あなたならこういうとき、どうしますか」とたずねたところ、「援助会員に苦情を言う」38.5%、「ファミリー・サポート・センターに苦情を言う」30.8%、「何もしない」10.6%、「その他」20.2%という結果であった(N=104 図10参照)。援助会員・FSCに苦情を言う者が約7割にのぼり、「何もしない」は約1割にすぎない。ここでも、おもちゃ・ゲームのケースと同様の傾向がみられる。なお、「その他」の意見としては、「自分で夕食をつくり、それを子供に与えてもらう」というものが多かった。少数意見としては、「援助会員をかえる」「そういうもの以外の食事を与えてくれるよう頼む」「援助会員に、“高校生以下にインスタント食は与えない方針です”と説明する」「“なるべく手づくりのものを食べさせてほしい”と援助会員に伝え、改善しなければ援助会員をかえる」等がみられた。

図10. 店屋物・インスタント食品ばかり出されたらどうする？

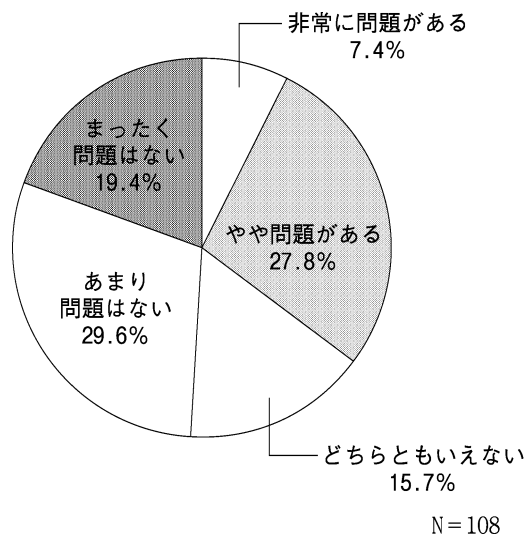


3-5-5. 育児中における親のあり方

「Aさんは24歳の専業主婦で、8ヶ月の子供がひとりいます。会社員のご主人は、育児に協力的で、土日は子供の面倒をみてくれます。実母もそばに住んでおり、週1回程度は、子供の面倒をみてくれます。しかし、ファッション関係に興味があるAさんは、子供と一緒に

はゆっくり買い物ができないとストレスをためています。そこで、A子さんはファミリー・サポート・センターの利用会員になって、買い物・リフレッシュのために、援助会員に週2回、一回3時間ほど子供を預けたいと思っています。しかし、専業主婦なのに他人に子供をみてもらうことに対しては罪悪感を感じています。あなたは、A子さんが子供を援助会員に預けることについて、どう思いますか」ときいたところ、「まったく問題はない」19.4%、「あまり問題はない」29.6%、「どちらともいえない」15.7%、「やや問題がある」27.8%、「非常に問題がある」7.4%、という結果が得られた（N=108 図11参照）。約半数はこの事例に問題を感じていない。従来は“育児中は、母親は自分の欲求を後まわしにして子供につくすべき”という自己犠牲的モラルのしぼりが強かったが、現在ではその種の社会的抑圧は弱まっていると思われる。「なぜ、他人にあずけて自分が買い物をするからといって罪悪感を感じるのかわからない。だって母親といってもひとりの人間だし、買い物したいと思うに決まっている（育児中も自分であることに変わりはないから我慢する必要はない。母親もひとりの人格だ）」という回答に顕著にみられるように、現代の若者は自己を保存したいという欲求（以下、自己保存欲求と略す）が強く、育児中も“独立した人格を保ちたい”と思いつけるのかもしれない。この調査からは原因を特定することはできないが、対象者には自己保存欲求をカウンターパワーとして、“母親はかくあるべし”という社会の抑圧をはねのける、という構図があるように思う。

図11. A子さんについてどう思うか



4. 総括および今後の課題

以上の結果より、

- ① 女性の社会進出を当然と捉え、
- ② 育児の外部化に抵抗がなく、

- ③ 育児サポート者に対する権利意識が強く、
- ④ 子育ての時期も“自分”を大切にしたい、
という次世代の親像がうかびあがる。

彼らが子育てに参入することをかんがみ、

- ① 育児サポートのニーズを計測すること
- ② 若年層が望む育児サポートのあり方の明確化
- ③ マンパワーの確保（①のデータをみて）
- ④ インフラの整備（①のデータをみて）
- ⑤ 若年層の価値観をふまえたシステムの改善
等の対策をとることが必要であろう。

⑤について詳述すると、育児サポート者に対する権利意識が強い利用会員のFSCへの参入により、ボランティア精神で活動する援助会員との間に摩擦がおこることが予想される〔(4) 助女性労働協会2001b:2-6〕。そこで、①講習会でヒューマンコミュニケーションの技法について教える（その際、トラブル事例を紹介して注意をうながす）、②センターを通じて金銭をやりとりできるシステムを構築する、③センター内にクレーム処理課を設ける（たとえば松戸市役所の“すぐやる課”のように、要請があるたびに駆けつけ速やかに対処するなど）、というような策をとり、システムを改良する必要がある、と思われる。

最後に、本調査は有意標本によるもので、ここから得られる知見には限界がある。今後調査を続行し、以下の点を明らかにすることが望まれる。

- ① 親の自己保存欲求が強まった理由（子供に対する犠牲的精神が弱まった理由）
- ② 育児中における親の自己保存欲求と“親はかくあるべし”という社会圧力の葛藤の実態
- ③ 居住地による意識の違い

本調査の対象者のうち有志5名（男性3名、女性2名）を対象に筆者が行ったインタビュー調査（平成14年2月実施）では、出身地域による意識の違いがみられた。インタビュー実施時に対象者から、「地方と都会では子育ての外部化に関する考え方が違う。地方はまだ地域で支援しあっているの、行政が介入しなくてもやっていける。それに、地方では女性の社会進出が都会ほどには進んでいない」というコメントが出された。この点に関しては、今後、明らかにする必要がある。さらに現在は、地方においても女性の社会進出、都市化（地縁の弱体化）が進む傾向にあるので、継続して調査を行い、変化をとらえる必要がある。

- ④ 学歴による意識の違い

学歴が高いほど女性の社会進出・育児の外部化に肯定的であり、サポート機関への権利意識・自己保存欲求が強いと予測されるが、実際はどうだろうか。

- ⑤ 性別による意識の違い（特に以下のA～Dについて）

A. 女性の社会進出

- B. 育児の外部化
 - C. 育児サポート機関に対する権利意識
 - D. 育児中における母親の自己保存欲求
- ⑥ 生育歴が育児サポートの考え方に与える影響

生育歴（誰の手で育てられたか、母親の職歴等）は、どのように育児サポートに関する考え方に影響をおよぼしているか。特に母親の就業形態の影響はどうか。

〔注〕

- (1) ファミリー・サポート・センター事業は、育児と介護を対象としているが、ここでは育児ファミリー・サポート・センターに焦点をしばって論じる。
- (2) 図1は、鶴岡ファミリー・サポート・センターホームページより一部修正の上、転載。
URLは、
<http://www.city.tsuruoka.yamagata.jp/Tsuruoka/koho/1999/9902tfsc.html>
2001年8月10日アクセス。
- (3) 助女性労働協会の調査によると、援助会員になった理由は、「働いているひとを援助したいから」52.9%、「収入になるから」27.1%、であった〔助女性労働協会2001b :3〕。
- (4) そもそも“有償ボランティア”という制度自体、矛盾する2側面をもっている。それがトラブルの誘因になっているのかもしれない。この点に関し、対象者は以下のように述べている。

コメント1

問題が起きるのはきっと、援助会員がボランティアだからであろう。お金をはさむと（高額であるほど）食事、教育などにおいて、きちんとした細やかなケアがなされるんだろなあ、と思う。でも、こういうボランティアのような“あたたかさ”がなくなったら、保育園と変わらなくなってしまうかもしれない。援助会員はボランティアとして子供をあずかり、利用会員は援助会員を“こういった仕事をしている人”とみなして子供をあずける。その意識の違いがトラブルにつながる気がした。

コメント2

こうやって子供あずかってくれる制度があるのはうれしいが、別にボランティアを強調する必要はないと思う。

コメント3

“みんなで助け合いましょう”的なボランティア精神でやっているところが、ちょっと問題だと思う。

〔引用文献〕

- 1) テクネ研究所1998『地域による育児支援—米子ファミリー・サポート・センターの活動』。
- 2) 財団法人女性労働協会2001a「ファミリー・サポート・ネット」Vol.6。
- 3) 財団法人女性労働協会2001b「育児サポートの現状—ファミリー・サポート・センター活動に関するアンケート調査」。